様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ５ 月　 ５ 日現在

機関番号：３４４１８
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2017
課題番号：２６３７０５８２

研究課題名（和文）古英詩創世記A, B, および古サクソン詩創世記における韻律的間テキスト性

研究課題名（英文）The metrical intertextuality of the Old English Genesis A and B, and the Old Saxon Genesis

研究代表者
鈴木　誠一（Suzuki, Seiichi）

関西外国語大学・外国語学部・教授

研究者番号：９０１４８２３９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：古英詩ベオウルフ、古サクソン詩創世記並びに古サクソン詩ヘリアント韻律法との比較を通して古英詩創世記AおよびBの個別韻律様式体系を主として共時的に、部分的には通時的観点も踏まえて、探求した。当該作品間の韻律特性群は、古サクソン創世記/ヘリアント > 創世記B > ベオウルフ > 創世記Aという韻律卓立度スケールに一般化され、創世記Aが最も短く、卓立性が低いことが実証された。同時に、創世記A、Bは共に同程度に４韻律位置原理という詩句構成基準から逸脱していることも明らかにされた。さらに、創世記Bに先立つ創世記Aの部分は、後半と比べて創世記Bとの韻律的類似性が高いことも示された。

研究成果の概要（英文）：This project explored, primarily from a synchronic perspective, the meters of Old English Genesis A and B in their own right and in their integration into a common overarching system, through a comparison with Beowulf, Old Saxon Genesis, and the Heliand. In-depth examinations of a wide range of metrical properties led to a postulation of the prominence scale, OS Genesis/Heliand > Genesis B > Beowulf > Genesis A, whereby Genesis A is characterized as minimal in metrical prominence. At the same time, however, Genesis A and B demonstrably deviate from the four-position principle to a similar extent, the fundamental rule of composition. Furthermore, in regard to an array of metrical features, an earlier part of Genesis A exhibits greater similarities to Genesis B than the later one.

研究分野：英語学　韻律学

キーワード：韻律　古英語　古サクソン語　古英詩創世記A　古英詩創世記B　ベオウルフ　ヘリアント　古サクソン創世記

１．研究開始当初の背景

本研究が目指すような韻律の詳細な比較研究は、いうまでもなく当該作品群に対して統一的な韻律分析わくに基づいた律読データベースを構築することが前提となる。同時に、依拠する律読システムは理論的・実証的妥当性が高いことが要求される。この点で、古英詩創世記 A、B（A、B の区別については次節を参照のこと）を対象とした従来の韻律分析（Doane 1991, 2013; Lewis 1987; Lucas 1988 など）は、不備が多いといわざるを得ない。これらはもっぱら Bliss (1967) の枠組みに依っているからである。Bliss の韻律理論は、数多くの韻律学者が指摘しているように、韻律型を十分な根拠もなく必要以上に細かく設定して異なった韻律型の間にみられる多くの共通性を見落としている。さらに、この理論は、発表されてから相当の年月を経ているためもあり、また、Bliss 自身が言語学者ではないことにも起因して、音韻論をはじめとする現代言語学の知見がとりこまれておらず、多くの韻律現象に対して原理的な説明を与えることができない。加えて、この枠組みは主としてアングロサクソニストによって便宜上慣習として用いられるにとどまり、そのためもっぱら古英語頭韻詩にしか適用されておらず、ゲルマン比較韻律論の観点からはその有用性は低いといわなければならない。こうした不備を克服すべくこの研究では、汎ゲルマン的射程を持ち近年の一連の研究で実証された高い説明力を有するゲルマン頭韻詩韻律理論（Suzuki 1996, 2004, 2014）を援用して、古英語詩創世記 A、B と古サクソン語詩創世記の韻律的間テキスト性の統一的解明を目指す。

古英詩創世記 A は、Fulk (1992) が明らかにしたように古英詩のなかではベオウルフについで古い韻律特性をいくつか示すことからその制作年代はかなり古く、遅くとも９世紀半ば以前に成立したと考えられる。これに対して、古英詩創世記 B は、２節研究の目的に述べるように古サクソン詩創世記の翻訳・改変と見なされているが、後者の成立は９世紀半ば過ぎと考えられているので (Doane 1991)、創世記 B の方が A よりもかなり新しいことになる。ところで創世記 A は、ベオウルフに比較される古い特性とともに、ベオウルフには見られない特異な点（A 型の第一弱音部の音節数と詩句頭余剰音節の頻度との間の相関性の欠如など）も指摘できる。驚くべきことにこうした特性の存在自体従来問題にされることはなかった。実は、ベオウルフに次いで長い古英詩創世記 A は、その包括的体系的韻律研究がいまだなされていないのである。そこで、比較研究の前段階として、この創世記 A を共時的に分析し、その韻律組織を解明する必要がある。その際、Suzuki (1996) の枠組みに依るベオウルフ韻律との細部にわたる対照研究が不可欠になる。次いで、同様の分析を創世記 B に対して行わなければならない。この基礎作業の完了を待って初めて、３種の創世記間の体系的比較に取り組むことが可能になる。なお、古サクソン詩創世記の韻律体系については、すでに Suzuki (2004)で明らかにされている。

２．研究の目的

Junius 11 写本に記された最初の作品である全 2936 詩行からなる古英詩創世記は、その途中第 235 行から 851 行までは古サクソン詩創世記からの翻訳であると考えられている（この挿入部分は古英詩創世記 B と呼ばれ、前後の部分—古英詩創世記 A と称される—から区別されている）。本研究は、韻律に焦点を絞って、古英詩創世記 A、B ならびに後者の原作品である古サクソン詩創世記の組織的対照研究を行い、古サクソン韻律特性がいかに古英詩韻律法に取り込まれ（あるいは排除され）改変されたかを考察し、古英詩創世記韻律法における借用・同化・再編過程を明らかにする。これにより、９世紀後半における大陸部と島嶼部間におけるゲルマン頭韻詩伝統交流の一端が示され、古英語時代中期における頭韻詩韻律法の継承と発展の動態が部分的に明らかになるであろう。

３．研究の方法

Suzuki (1996, 2004, 2014) の枠組みに基づいて、古英詩創世記 A および B の共時的韻律構造分析を行い、律読データベースを構築する。このデータセットに対して様々な視点から分析を加え、個別韻律構造特性（パラメータ）の同定を行い、それらの相互依存性や派生関係の有無を検証し、パラメータの有機的集合体としての韻律システムを再構成する。かくして、創世記 A および B の韻律組織がそれぞれ措定されることになる。パラメータの多くは、絶対的ではなく統計的有意性を属性とするので、適宜統計検定を施し特性間の相関性、有意な分布パターンの画定を行う。具体的には、次のような特性が主要なパラメータとして措定される。1 詩句頭余剰音節 (anacrusis) の頻度と大きさ（音節数）; 2 弱音部 (drop) の大きさ（音節数）; 3 詩句頭余剰音節の出現と弱音部の大きさとの相関性; 4 重い弱音部と軽い弱音部の対立；5 音節分解 (resolution) の頻度と環境; 6 長い強音部 (lift)と短い強音部の対立；7 韻律型 (verse type)の分布と使用頻度; 8 単純頭韻(single alliteration)と二重頭韻 (double alliteration)の相対的割合; 9 語彙範疇と強音部・弱音部の関係（非名詞類が強音部を形成する確率と名詞類が弱音部を形成する確率）; 10 韻律構造と統語構造との一致の度合い。今一度強調しておきたいのは、個々の作品の背後に措定される韻律組織は、上に例示した個別特性の単なる目録ではなく、それらを統合した規則と制約体系としての組織であるということである。また、上記３作品に加えて、すでに詳細が明らかにされているベオウルフ (Suzuki

1996)と古サクソン詩ヘリアント (Suzuki 2004) 韻律組織との比較対照も行う。

４．研究成果

具体的な成果はもっぱら共時的研究の領域に関わるものである。

(1) 韻律卓立性スケール

単純/二重頭韻の割合、詩句頭余剰音節の生起頻度と分布、３韻律位置 (metrical position) からなる例外的短詩句の出現頻度、弱音部の長さと重さ、音節分解と音節分解停止の割合をはじめとする韻律特性パラメータ群の値を総合すると、次のような韻律卓立性スケールが措定される：

古サクソン創世記/ヘリアント > 創世記 B > ベオウルフ > 創世記 A

このような相対尺度により、創世記 A が最も韻律的卓立性が低いと一般化される。

(2) ４韻律位置原理 (four-position principle) の拘束力

しかし、上記の成果に基づいて創世記 A は単に実現された詩句が短く韻律的際立ちに乏しいという表層レベルの観察だけではその韻律体系を明らかにしたことにはならない。各詩句 (verse)は４韻律位置から成り立つという詩句構成の根本原理の相対的妥当性の見地からも精査が必要である。

①３韻律位置からなる短詩句

短詩句（例　1515a *holmes hlæst* ‘sea’s burden’ / x /; / = 強音部；x = 弱音部) は、創世記 A においてベオウルフなどよりも統計的に有意な高頻度で出現することが実証された。従来、これらの例外的短詩句は後世に生じた単なる書記上の誤りとして片付けられることが多かった。こうした通説とは異なり、短詩句は書記者による偶発的誤りによるのではなく次のような構造的要因に支配された韻律現象であることを明らかにした。まず、欠落している韻律位置は句末尾の弱音部をなしている。そして、問題の欠損要素の前には（直前とは限らない）連続する２つの強音部が現れている：(...)/ /(...)x；(...)は任意の要素。究極的に見ると、創世記 A がそもそもこのような短詩句を許容するに至ったのはベオウルフに比べて４韻律位置原理の拘束力が弱まったことに起因すると思われる (Suzuki 2017)。

②詩句頭余剰音節 (anacrusis)

生起頻度ならびに余剰音節の大きさ（音節数）・語彙形態的性質に関して調査した結果、創世記 A は、ベオウルフと出エジプト記（Junius 11 所収の作品の一つ；下記(3) ②参照）と並んで余剰音節の出現頻度が低く音節数も少ないにも関わらず、典型的な余剰音節を形成する接頭辞の割合がこの二作品に比べて著しく低いことがわかった (例 2772b *swā him cynde wǣron* ‘as were natural to him’ x / x / x; *swā him* が詩句頭余剰音節をなす)。接頭辞が余剰音節のプロトタイプ性をもはや有していないという点で、創世記 A はヘリアントや古サクソン創世記あるいは後期古英詩と同様な特徴を示しているのである。接頭辞は語彙形態論的にもっとも自律性・卓立性の低い要素であることから、ベオウルフでは詩句頭余剰音節は独立した韻律位置を形成していないと考えられる (Suzuki 1994)。こうした語彙形態的最小単位との優先的結びつきが認められない創世記 A においては、創世記 B などと同様、詩句頭余剰音節は自立韻律位置を構成していると推定される。ベオウルフに見られる余剰音節が付加される詩型に関する制約（例えば、E 型には余剰音節は現れない）や分布制限（例えば、余剰音節の出現はもっぱら a-verse に限定される）が創世記 A には当てはまらないことも考慮すると、詩句頭余剰音節を伴った通常の詩句 (normal verse) は４＋１計５韻律位置から成り立っていると結論されなければならない。つまり、創世記 A では、余剰音節が全く自由に任意の詩句頭強音部の前に現れることができるのである。従って、その出現は、ベオウルフの場合とは異なって、付加される詩句の属性から派生されるという高い予測可能性は持たないということになる。故に、創世記 A も創世記 B と同じくベオウルフに比べて４韻律位置原理からの逸脱の程度が高いと言わなければならないであろう。より具体的に言うと、創世記 A は卓立性低減、創世記 B は卓立性増加という逆方向の、しかし同程度の４韻律位置原理からの逸脱を受けているのである。

以上のように、創世記 B のみならず創世記 A に対しても４韻律位置原理の束縛力低下が推定される。では、なぜベオウルフに次いで早い時期に作られたと考えられる創世記 A までもが４韻律位置原理遵守の度合いを顕著に弱めることになったのであろうか。この問題は後述(4)の次期プロジェクトで扱われるであろう。

(3) 韻律構造と書記構造の対応関係

①節と韻律構造

Junius 11 写本では、節（70~100 詩行からなる韻律単位）区分は、そのはじめを装飾文字で示しその終わりを句点で表している。こうした書記構成法は、韻律構造といかなる関係にあるのだろうか？調査の結果、創世記 A において節冒頭の詩句は弱音部で始まる強い傾向を示すのに対して、創世記 B にはそうした相関性は一切認められないことが判明した。創世記 A は、この点でベオウルフやヘリアントと共通しているのである。特に、古サ

クソン詩ヘリアントも同じ特徴を共有しており、原作品が古サクソン語で記されていた創世記 B とはこの点に関して区別されていることは興味深い。

②詩句と韻律構造
Junius 11 写本では、古英詩写本中唯一、句点がかなり一貫して用いられている（写字生 A 担当部分、すなわち、創世記（A および B）、出エジプト記、ダニエルの三作品全体)。これらは概ね詩句の区切りに対応していることが知られている。しかし、句点と詩句の区切りとの一致の度合いは、作品によって異なる。出エジプト記だけが他の作品－創世記 A、B、ダニエル－よりも際立って一致度が高いのである。一般に出エジプト記はベオウルフにその韻律が最も近いとみなすことができることから、この一致度の高さは韻律の規則性・標準化の高さに帰すことができるであろう。とすると、創世記 A と創世記 B は少なくとも句点による表記を行なった当事者である写字生 A にとっては韻律規則性からの逸脱が同程度であるととらえられたのではないかと推測される。ということは、表面上の違い－詩句の長さ・卓立度が対極的である（上述 (1) 韻律卓立性スケール参照）－にもかかわらず創世記Aと創世記Bの韻律はベオウルフに代表される古典的古英語韻律法からはほぼ同程度に隔たっていると一般化できそうである。そして、韻律規則性は最終的には 4 韻律位置原理（上述(2)）に還元されることから、とどのつまりは創世記 A、B 共に４韻律位置原理から同じように逸脱しているという仮説（上記(2)②）がほぼ同時代の証言によって確認されると主張できるであろう。この含意するところの究明は今後の研究（次節末尾参照）に委ねたい。

(4) 創世記 A１と創世記 A２
創世記Aおよび創世記Bは現存写本においては単一作品である「創世記」として編集・統合されていることに鑑み両構成部位を一括して捉える統一的観点からも韻律構成を検証した。その結果、創世記 B 挿入に先行する創世記 A の部分（上記２節研究の目的参照；創世記 A１と呼ぶことにする）と挿入後の創世記 A（創世記 A２として区別する）とでは二重頭韻の生起頻度をはじめいくつかの韻律特性が顕著に異なることが明らかとなった。詩句頭余剰音節等も合わせて考慮すると、創世記 A１の方が創世記 A２に比べて創世記 B との類似性が高い－韻律的卓立性が高い－と一般化できるのである。つまり、上記(1) 韻律卓立性スケールは、該当部分のみ表記すると次のように細分化される：

創世記 B > 創世記 A1 > 創世記 A2

こうした一連の現象を説明するためには、Junius 11 写本成立以前の写本製作の系譜を再構成する必要がある。すなわち、通時的・系統的探求が求められるのである。そして、これは次期科研費プロジェクト（Junius 11 古英詩創世記の韻律と挿絵－初期西サクソン版創世記及び西フランク版創世記の再構成）の研究課題となる。

引用文献

Bliss, A. J. 1967. *The metre of Beowulf*. 2nd edn. Oxford: Blackwell.

Doane, A. N. 1991. *The Saxon Genesis: An edition of the West Saxon Genesis B and the Old Saxon Vatican Genesis*. Madison, WI: University of Wisconsin Press.

Doane, A. N. 2013. *Genesis A: A new edition, revised*. Tempe, AZ: Arizona Center for Medieval and Renaissance Studies.

Fulk, R. D. 1992. *A history of Old English meter*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.

Lewis, David J. G. 1987. The metre of Genesis B. *Anglo-Saxon England* 16, 67–125.

Lucas, Peter J. 1988. Some aspects of Genesis B as Old English verse. *Proceedings of the Royal Irish Academy ser. C* 88, 143–178.

Suzuki, Seiichi. 1996. *The metrical organization of* Beowulf: *Prototype and isomorphism*. Berlin: De Gruyter.

Suzuki, Seiichi. 2004. *The metre of Old Saxon poetry: The remaking of alliterative tradition.* Cambridge: Brewer.

Suzuki, Seiichi. 2014. *The meters of Old Norse eddic poetry: Common Germanic inheritance and North Germanic innovation*. Berlin: De Gruyter.

Suzuki, Seiichi. 2017. Three-position verses in *Beowulf* and *Genesis A*: Syntagmatically-induced exceptions to the four-position principle. *Journal of Germanic Linguistics* 29, 50–84.

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

Suzuki, Seiichi. Three-position verses in *Beowulf* and *Genesis A*: Syntagmatically-induced exceptions to the four-position principle. *Journal of Germanic Linguistics* 29 (2017), 50–84.

〔雑誌論文〕（計　1　件）

６．研究組織
(1)研究代表者

鈴木　誠一（SUZUKI, Seiichi）
関西外国語大学・外国語学部・教授
研究者番号：90148239